

■ムソルグスキー(ストコフスキー編曲)／展覧会の絵

《展覧会の絵》のオーケストラ編曲と言えば、最もよく知られているのは1922年のラヴェル版である。原曲はモDEST・ムソルグスキー（1839—81）の生前には演奏されず、彼の死後、リムスキー・コルサコフが改訂して出版した。ラヴェルは自筆譜を見ることはかなわず、この出版譜で編曲したのである。だが、ラヴェルの華麗な管弦楽法は原曲の味わいを損なっているとも言われ、他にも数々のオーケストレーションが試みられてきた。

今日、演奏されるのもその一つ、レオポルト・ストコフスキー（1882—1977）が1939年11月17日に常任指揮者だったフィラデルフィア管弦楽団の演奏会で披露した編曲版である。4管編成でホルンが8本、オプションでオルガンまで含まれた大編成で、ラヴェル版を聴きなれた耳にはスラヴ的な重厚さや野性味が感じられるはず。「テュイルリーの庭」と「リモージュの市場」がカットされているのはフランス風に響く曲であることと、おそらく改訂の際にリムスキー・コルサコフが書き加えたのではないかと疑っていたから。「プロムナード」の5回目がカットされているのはラヴェルと同じ。

冒頭は晴れやかな金管ではなく、弦楽合奏による「プロムナード」。「古城」はイングリッシュ・ホルンの独奏、「殻をつけた雛の踊り」は終結部の鳴き声が原曲どおり2回である。「バーバ・ヤガーの小屋」は怪奇色たっぷりでホルンのグリッサンドが印象的。「キエフの大門」は鳴り物を派手に用いつつ、弦合奏の豊饒なコラールを聴かせる壮大な音楽となる。

白石美雪

◇ムソルグスキー（ストコフスキー編）／展覧会の絵

フルート4（ピッコロ持ち替え2、アルトフルート持ち替え1）、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（Es管クラリネット持ち替え1）、バス・クラリネット、ファゴット3、コントラ・ファゴット、ホルン8、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、スネアドラム、バスドラム、タンバリン、トライアングル、シンバル、タムタム、マリンバ、ビブラフォン、鐘、オルガン、チェレスタ、ハーブ2、弦五部

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。